



博士(人間科学)学位論文 概要書

幼児期における目標志向性の  
形成と変化に関する研究

A study of formation of goal orientation  
during early childhood and its subsequent change

2004年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

高崎 文子

TAKASAKI Fumiko

研究指導教員：野嶋 栄一郎 教授

「目標理論」とは、個人が追及する「目標志向性」(ラーニング・ゴール志向とパフォーマンス・ゴール志向)の違いによって、達成場面における認知・感情・行動パターンの個人差を説明するものであり、近年の達成動機づけ研究では、最も注目を集める理論のひとつである。目標理論に関しては様々な側面から検証され知見の蓄積も多い。しかし、そのほとんどは学齢期以上の年齢を対象としており、幼児を対象とした目標志向性の形成と変化について取り上げた研究はほとんどなかった。本論文では、達成動機づけの個人差を説明する「目標志向性」を、達成場面において個人が適用する認知的枠組みであるととらえ、その形成と変化に焦点をあてた研究を行った。

本論文は、全6章から構成され、著者の行った10の研究が含まれている。

第1章では、動機づけ研究の系譜の中に、達成動機づけ研究を位置づけ、さらに本論文で取り上げる「目標理論」を位置づけた。その中で、検討すべき4つの課題を挙げ、後の各章にて検討した。

第2章では、幼児を対象とした目標理論研究の方法に焦点をあて、達成場面における興味や関心を手がかりに、二者択一の強制選択の質問形式で、幼児の目標志向性を判定する測度の開発を行った。その結果、測度の信頼性と妥当性が確認され、幼児を対象とした目標志向性の判定が可能となった。以下の研究では、この測度を用いて目標志向性の判定を行った。

第3章では、幼児が達成場面において用いる認知的枠組みの特徴と目標志向性の関連について明らかにすることを目的とした。その結果、達成場面における情報の選択的注目や、得られた情報への重みづけの特徴などから、パフォーマンス・ゴール志向の幼児は、承認されることに価値を置き、情報として承認に注目をするような認知的枠組みを持っているということが明らかになった。

このように目標志向性が、達成に関する認知的枠組みであるとする、その枠組みは社会化の過程におけるさまざまな経験の中で形成されていくと考えられる。特に幼児期は、養育者や保育者からの日常的なフィードバックの影響を受け、「達成するとはどういうことか」「達成場面では何が重要であるか」というような、達成に関する認知的枠組みが形成される時期だと考えられる。

このため第4章では、養育者が日常的に、どのようなタイミングでどのような事柄に対してフィードバックを与えているのか、また、養育者の日ごろの養育態度が目標志向性と達成反応の挑戦性にどのような影響を与えているかを検証した。その結果、日ごろのフィ

ードバックや養育態度によって、養育者や保育者は、達成結果と価値を結びつけるような認知的枠組みの形成に影響を与えており、それが目標志向性の個人差となって現れていると考えられた。

目標志向性が、達成に関する認知的枠組みであるとするならば、それは比較的安定的な個人特性であるかもしれないが、さまざまな経験をする中で、現在の目標志向性は変化する可能性があると考えられる。第5章では、子どもの目標志向性や達成行動が、周囲からの影響を受けて変化する可能性について検討した。実験場面においては、個人の目標志向性と教示とが合致する場合は遂行が促進され、合致しない場合は、遂行の低下が見られたが、教示による影響を受け遂行の回復が早い場合があることがわかった。この結果は短期的な影響を示したものであるが、長期にわたって周囲からの働きかけがあった場合、個人の認知的枠組みの変化を伴って、目標志向性が周囲からの要請に沿うように変化する可能性が示唆された。また、幼稚園のクラス活動を観察した結果、達成に関する個人の認知的な枠組みは、周囲からの一方的な働きかけによって影響を受けるといよりも、集団における成員相互のやりとりの中で、その集団に適用される認知的枠組みが出来上がっていくことが明らかになった。つまり、個人の持つ達成に関する認知的枠組みは変化する可能性があるが、その変化の要因となるのは、本人も含めた周囲との相互作用であると言えるだろう。

第6章では以上の結果をもとに、総合的な考察を行った。目標志向性を達成場面において個人が適用する認知的枠組みととらえなおす事で、その形成過程や変化について検討することができるようになった。この認知的枠組みの形成や変化という視点は、目標志向性の発達的研究にひとつの可能性を示すことができたという点で評価されると考える。

目標志向性は、達成場面で与えられる承認のタイミングや対象によって、達成に関する認知的枠組みや認知的要素の結びつきが促進されることで形成されることが判明した。パフォーマンス・ゴール志向につながるような、達成と価値とを結びつけないためには、失敗時にも承認フィードバックを与えることの有効性が示唆された。また、幼児期から児童期への移行や発達を考える際には、個人の変化や、周囲の働きかけの変化だけではなく、個人と周囲との関わり方の変化を考慮して検討をすすめるべきであることも示唆された。